



『選択集』 付属の意義

梯 實 圓 (かけはし じつえん)

親鸞聖人が、恩師法然聖人から、その主著『せんじゃくほんがんにんぶつしゅう選 択 本 願 念 仏 集』を見写することを許されたのは、元久二（一二〇五）年、三十三歳の時でした。

二十年にわたる比叡山での修学を捨て、聖徳太子の夢の告げに従って生涯の師として選んだ法然聖人の下に入門されてから四年の歳月が流れていました。しかし、よほど法然教学に通達した高弟にしか伝授されなかった秘蔵の書を、入門してわずかに四年しか経っていない若い弟子に伝授されたばかりか、引き続いて聖人の真影（肖像画）の図画までも許されたのは、異例のことでした。聖人から直接『せんねい選択集』の伝授を受けたことを確かめられる人は、その撰述に加わった三人を入れても十人前後しかありません。『しちかじょうせいがい七箇条制誡』、『さいほうしなんしやう西方指南抄』本によれば、それに連名した門弟は二百余名いたといわれています。京都近辺だけでもそれだけの人数がいたわけですから、各地に散在している門弟はおびただしい数に上ったはずです。にもかかわらず『せんねい選択集』の伝授を受けた人は余りにも少なすぎます。

『せんねい選択集』は、建久九（一一九八）年、法然聖人に深い帰依をささげていた前関白さきのかんぱくふじわらのかねざね藤原兼実のたつての要請にこた応えて著された浄土宗の本格的な教義書でした。しかしその巻末には、「ご高覧になった後、この書は壁の底に埋めるなりして決して人目につくようなところに置かないでください。心なき者が読めば、念仏をそし謗り、その罪によってその人が悪道に落ちる恐れがあるからです」と記されていました。それほどこの書に説かれているせんねい選択本願念仏の教えは過激であり、先鋭であって、当時の仏教学者の決して認めることのできない教説だったのです。法然教学を非難した人たちが、いずれも当時最高の学僧であり、清廉潔白な高僧として尊敬されていたかさぎ笠置の解脱上人げだつしやうにんじやうけい貞慶や、とがのお梅尾の明恵みやうえしやうにんこうべん上人高弁であったことによっても知ることができましょう。

生死を超えてさとりを求める者は、しやうどうもん仏教の中にじやうどもん聖道門とじやうどもん浄土門の別があることを知り、聖道門をさしおいてじやうどうもん浄土門に入れ。浄土門に入ろうと思うならば、一切のぞうぎやう雑行を捨ててしやうぎやう正行を修行しなさい。正行を修行しようと思う者は、どくじゆ読誦、かんざつ観察、らいはい礼拝、さんだんくやう讃嘆供養といったじよごう助業をかたわ傍らにして、しやうじやうごう正定業であるしやうみやう称名一行を専修しなさい。称名は、せんじゆ善悪、えら賢愚をしゆじやう簡はず、一切のぎやうごう衆生を平等に往生させるぎやうごう行業として阿弥陀仏がせんねい選択し選定された正定の業であるからですというのがその結論でした。そこでは、ぼだいしん仏道修行の基礎とされていたさんみつ かじ戒律も、ぼだいしん菩提心も、さんみつ かじ六度の行も、ぼだいしん止観の行も、さんみつ かじ三密加持もすべて捨てられていました。それは仏教そのものを否定する邪道であると彼らが非難するのも無理はありません。

法然聖人の門弟であっても、聖道門を捨てて浄土門に入っている人はあまりいませんでした。まして自力を捨てて他力に帰するというような宗教経験を持っている人は極めて少なかったようです。法然聖人と一味の信心りやうりやうを持っている人は寥々たるものでした。その意味で法然聖人も、本当は孤独な人だったのではないのでしょうか。

親鸞聖人は、法然聖人^あに会うまでに、天台教学はもちろん、源信^{げんしん}僧都以来蓄積されてきた日本天台の浄土教を論議を通して精密に学んでおられたはずで、おそらく法然聖人に出遇って、その教えの真髓に触れたときの驚きは想像を絶したと思います。吉水の草庵に、百日間、一日も欠かさず通い詰めて聞きだし、「雑行^すを棄てて本願に帰す」という強烈な回心を通して初めて門下に連なることになったわけです。

こうしてひたすら法然教学を学び続け、やがて『歎異抄』に伝えられているような、「善信^{ぜんしん}（親鸞）が信心も聖人（源空）の御信心も一つなり」といい切ることでできる心境に到達されたわけでした。それを聞いた同門の勢観房^{せいかんぼう}源智や念仏房^{ねんぶつぼう}念阿たちが厳しく反論したのは、そのようなことを法然聖人から聞いたことがなかったからです。法然聖人は、念仏は選択本願の行であるから、万人平等であるとはいわれていましたが、信心が一つだとはいわれていなかったからです。恐らく法然聖人は、善信房（親鸞）の言葉を聞いて驚かれたと思います。しかし聖人は即座に、「源空が信心も、如来よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も、如来よりたまはらせたまひたる信心なり。されば、ただ一つなり」と仰せられたといわれています。善信房がいわんとして、まだ言い切れていない言葉を与えて弟子の説を包摂していかれたのでした。それが「如来よりたまわりたる信心」という言葉です。念仏も信心も如来より賜った行であり、信であるという教学的視野がここで開けていきます。後に親鸞聖人が開示される本願力回向の行信という教義体系は、それを展開されたものでした。

この事件が『選択集』伝授の前であったか後であったかはさだかではありません。しかし少なくとも法然教学^しの真髓を明確に捉え、師を凌ぐほどの境位に達している若い弟子をご覧になったとき、浄土の教法は、素晴らしい伝承者を得ていることを慶びながら『選択集』を伝授し付属し、さらに真影の図画までも許して、後事を託されたのに違いありません。

(勧学)